

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編27話

アレキサンダー大王とアリストテレス ギリシャ

ギリシャは首都アテネ以外訪れたことが無く、ギリシャ神話の世界をいつか訪ねたいと願っていた。親しくしていたJTBの役員に話すとすぐに旅行案内を送ってくれた。

ウィーンから飛行機で1時間、ギリシャのテッサロニキに到着した。目抜き通りのショーウィンドウの飾りつけなどを見ると、ファッションに疎い男の目からみてもとても洗練されているとは思えず、野暮ったく大きな田舎町といった印象である。

翌朝バスでテッサロニキを後にする。道路際に白い柱が幾本か立っている。ここも遺跡の一つかなと思われた。するとバスが傍の駐車場に入った。ガイドからこの遺跡は1957年に発掘されたペラの遺跡で、かの有名なアレキサンダー大王の生誕地であり、父親のフィリッポス2世の居た宮殿跡だと告げられた。



道路際にあるペラの遺跡



アレキサンダー大王 生誕の地

ギリシャ神話にばかり関心が向いていて、アレキサンダー大王の事柄が頭からすっかり抜け落ちていたことに気づいた。テッサロニキはじめここら一帯は、かつてのマケドニア王国であったことをうかつにも忘れていたのである。

ペラの遺跡には数本の白い柱とところどころの床がモザイクに覆われているだけの遺跡である。何せ今から2500年も前の遺跡なのでこれ以外見るべきものがなく、30分ほどの見学を終えた。ペラの遺跡の印象は“つわものどもが夢の跡”である。

ペラを後にして次に向かったのは、1977年偶然発見されたというマケドニア王フィリッポス2世の墳墓ヴェルギナ遺跡である。ペラからはおよそ40分の行程である。ヴェルギナは土産物屋とレストランがあるだけの小さな村で、その一角に芝生に覆われた高さは1.5mほどの小高い土饅頭のような塚があり小さな入り口を入ると地下へと誘われる。



ヴェルギナの遺跡 この地下にフィリッポ2世が眠る

展示室にはまばゆい黄金の発掘品の数々が並んでいる。展示室の階段を下りきった奥まったところがフィリッポ2世の霊廟になっている。撮影厳禁のため見張り員が厳しい目を光らせている。此の墳墓からはマケドニア王国の紋章入りの副葬品が発掘され、暗殺されて世を去ったフィリッポス2世の廟であることが判明したのである。

ヴェルギナの遺跡を後にしながら、先年訪れたイスタンブールにある考古学博物館を思い起こした。



イスタンブールにあるアレキサンダー大王の棺か

た。巨大な大理石の石棺を前にして、ガイドから説明を受けた。ガイド曰く、この石棺はシドン（=現レバノンのサイダー。フェニキア人の古代都市）から発掘されたアレキサンダー大王の棺だというものだった。戦いの様子を描いた石棺の彫刻は実にリアルで、今彫り上げたばかりの様な真新しく鮮明な彫像であった。

ギリシャはアクロポリスの丘に均整の取れた姿で建つパルテノンの神殿や、世界の“へそ”といわれた聖地デルフィ、メテオラは天を衝く突出した幾つもの

岩峰にどうよじ登ったのかその頂に修道院を建て瞑想にふけた奇岩群、一日で回るエーゲ海ツアーなどギリシャ全土にはこれでもかというほど歴史と観光資源が満ち溢れている。

また首都アテネにも辺鄙な地方にもギリシャ正教の教会が沢山目に付き、ギリシャは深い信仰の地であることを伺わせる。ギリシャの教会は見慣れたカソリックの教会とはイコンに飾られた内陣や香の匂いさえ異なっている。ギリシャの国土は農業に適した耕地が少なく灰色の岩肌を持つ岩山に覆われている。移動の道路も狭くそう整備されているとは言い難い。エーゲ海に浮かぶ歴史のある島々を巡る船旅はギリシャ旅行のもう一つの楽しみでもある。オリンポス山を中心とするギリシャ神話の世界は、人々の空想や想像が作り上げた世界で、神話の世界の遺跡が現実に目の前に存在しているわけではないことが旅をして感じられた。



アテネの学堂 ラファエロ ヴァチカン

不思議に思うことは、何故ギリシャで現代に通じる学問の基本が形造られたのか。ギリシャには多くの名前が今に伝わる大学者、プラトン・アリストテレス・ソクラテス・ヒポクラテス・アルキメデス・ピタゴラス等を輩出している。ヴァチカン博物館にはラファエッロの描いた名画「アテネの学堂」があるがこの絵画の中にはギリシャの名のある学者が全て描かれているといわれている。

不思議を感じるその2はシチリア島である。シチリアの歴史はギリシャ、ビザンチン、アラブ、ノルマンと支配者が変わる複雑な経緯を経ている。シチリア

にはギリシャ時代の遺跡が今にいくつも残っている。地理的にシチリア島はアドリア海を挟んでギリシャとは近くギリシャ人の往来が頻繁であったように思われるが、シチリアのアグリジェントには神殿の谷と呼ばれる地域があり、数キロにわたりギリシャ神殿が立ち並んでいてこれは圧巻で



ギリシャ神殿



コンコルディアの神殿

ある。もっとも古いものは紀元前520年に建造されたとするヘラクレスの神殿といわれている。アテネにあるパルテノンの神殿に酷似しているコンコルディア神殿は保存状態もよく堂々と海をバックにそびえ立っている。

またシラクサは、“アルキメデスの原理”を発見してユリーカ（わかったぞ！）と叫んで風呂から飛び出したアルキメデスの生誕地でもある。

シチリアにはギリシャ時代の遺跡がいくつも残されている。タオルミーナにあるギリシャ劇場はエトナ山と真っ青な海を背景に紀元前3世紀に建造され、覗き見た瞬間思わず感嘆の声をあげるほどの素晴らしい背景の中に、そのたたずまいを今に残している。



古代のギリシャ劇場 シチリア 後方エトナ山・左側は海

アレキサンダー大王＝アレクサンドロス3世

（紀元前356年7月20日～紀元前323年6月10日）

マケドニア国王フィリッポス2世の子としてマケドニア・ペラ（現ギリシャ）で生まれた。少年時代は彼の偉大な哲学者アリストテレスを家庭教師に迎えギリシャについて多くのものを学んだ。父王が暗殺され、20歳で国王に即位するも治世のほとんどを戦に費やした。戦に対してはたぐいまれなる軍事的才能を有していた。

紀元前334年アレキサンダー大王は兵を率いてダーダネルス海峡を渡り小アジアに攻め入り、ペルシャ帝国を紀元前331年に攻め滅ぼした。ペルシャに戦勝しペルセポリスの大宮殿などおびただしい財貨を獲得した。

そして中央アジア、インドへ攻め上り、さらに砂漠を超えアフガニスタン遂にはロシアへも侵攻し

た。アレキサンダー大王はギリシャ、エジプト、インド北部に至る広大な大帝国をわずかの期間で築き上げた。

324年バビロン（=現イランの首都バクダットから南に90km、ユーフラテス川一帯に広がるメソポタミア地方の古代都市）へようやく凱旋した。

アレキサンダー大王は征服したペルシャ人をギリシャ人と対等に扱い、さらに民族融合を図るため部下にペルシャ女性との結婚をうながし、自らもペルシャ人女性をめとるなどして文化の東西融合に努めた。

また征服した地にアレクサンドリアという自身の名を冠した都市を建設し、ギリシャ人を移住させるなどした。アレキサンダー大王の統治する帝国はギリシャ・エジプト・オリエントにまたがり広大であった。そこへギリシャ文化が浸透し文化融合が起こり新しいヘレニズム時代の幕開けへと繋がっていく。アレキサンダーは宗教や生活習慣など文化の融合、さらには勝者、敗者にこだわらず民族間の融和政策をとったことでも知られる。

だが前途洋々のアレキサンダー大王は、バビロンに凱旋して間もなく32歳の若さで急逝した。

アレキサンダー大王の容姿としてよく知られているのは、モザイク画の馬上にある戦闘中の姿である。鎧姿で槍を構えザンバラ髪でもみあげの長い姿だが、これは強大な力をもったペルシャのダレイオス3世との戦いで勝利した時の姿を描いたものといわれ、イタリアのポンペイ遺跡から発掘されナポリの考古学博物館に所蔵されている。

アリストテレス 哲学者 紀元前384～紀元前322年3月7日)

アリストテレスは紀元前384年にマケドニア王国の支配下にあったトラキア地方（現ブルガリア・トルコ・ギリシャにまたがる地方）に生まれ父親はマケドニア王の侍医であった。アリストテレスはソクラテス・プラトンと共に比類を見ない大学者といわれている。三段論法などは良く知られているところであろう。

政治・生物・自然・論理などの多方面の学問分野の研究に関わり多くの著述を後世に残している。